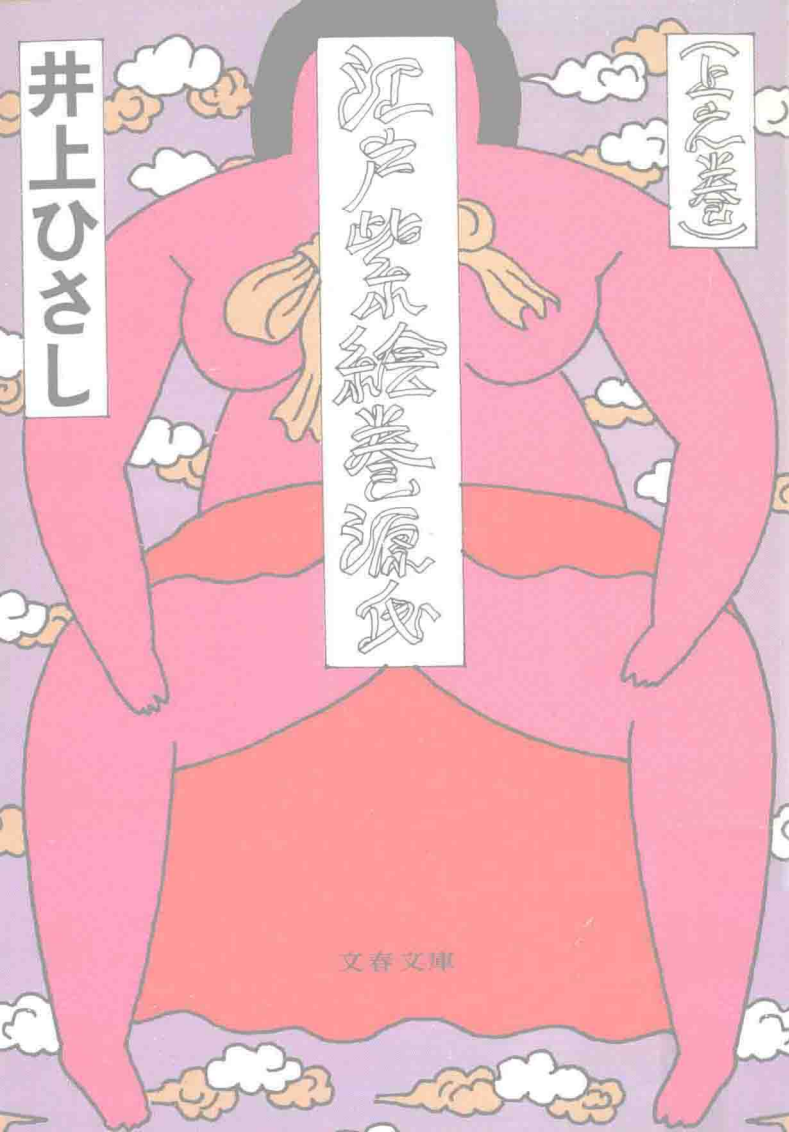
井上ひさし
江戸紫絵巻源氏
上之巻
文春文庫

文春文庫

111-12

江戸紫絵巻源氏（上）

定価はカバーに
表示してあります

1985年6月25日　第1刷

著　者　井上ひさし

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102

TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4 16-711112-8

文春文庫

江戸紫絵巻源氏
(上)

井上ひさし

文藝春秋

江戸紫絵巻源氏（上）目次

桐壺　七
帚木　一六
空蟬　二六
夕顔　三九
若紫　五一
末摘花　六六
紅葉賀　七八
花宴　九〇
葵　一〇三
賢木　一一五
花散里　一二六
須磨　一三八
明石　一五〇
澪標　一六二
蓬生　一七一
関屋　一八四
絵合　一九六
松風　二〇九
薄雲　二一〇
朝顔　二三一
乙女　二四二
玉鬘　二五四
初音　二六四
胡蝶　二七六
螢　二八五
常夏　二九六
篝火　三一二
野分　三二二
行幸　三三一
藤袴　三四三
真木柱　三五四
梅枝　三六五
藤裏葉　三七六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

江戸紫絵巻源氏（上）

桐壺

何という天皇様の御代のことでしたか、太夫・格子・さん茶・うめ茶・局などが、憂き勤めをしておりました遊里に、水呑百姓の七女で、口べらしと親の貧乏を救うために、売られてきた娘がありました。さっそく、下っぱの遊女として、苦界勤めをはじめましたが、学もなければ教養もなく、歌をうたわせれば胴間声、書をかかせれば金釘流、香を焚かせれば咳くしゃみ、三味線ひかせれば猫おどり、茶をひいて売れ残ってばかりいるのでした。

姿かたちがよければ、それでも救われたのですが、どんぐりまなこに団子鼻、大耳大口大ぐらい、どこにも取得はございませぬ。おまけに、労咳の気味があり、コンコン、コンコン咳ばかり、お客がコンのもそのせいでしょうか。またそういう体質なのか、いつも大きな腫物をつくっておりますので、朋輩たちは「大きな腫物だこと、ほんに大腫物、大腫物！」などと囃します。

部屋には見るべき調度もありませんが、やや人目を惹くものといえば赤銅の壺ひとつ、咳をして痰

が出たときに使う壺です。朋輩たちはこの壺までもからかいの種にして、「痰切り壺さん」とか「切り壺さん」などと呼ぶのでしたが、いつの間にか、このあだ名が源氏名となり、この遊女のことを「桐壺」とだれもが呼ぶようになりました。つまり桐壺は誰よりも時めかない遊女だったのでした。

さて、ここに毎夜のようにおしのびで遊里通いをなさっておいでの身分の高いお方がありました。つんけんして無愛想ですこし冷え症の気味もある奥方様にお飽きになって、おもしろくもない夜を過しておられましたのを江戸家老が見て心を痛め、一度か二度なら悪所通いも見聞をひろめるよい機会になるであろうと老婆心ならぬ老爺心、ある夜、こっそり殿を遊里に送りこんだのでしたが、みめうるわしく床上手、教養深く土手高き、色里の太夫たちに、殿様はすっかりしびれておしまいになり、今では遊里が江戸屋敷――といったような有様なのでした。

けれども、人の欲というものは限りのないもので、はじめはよろしいように思えた太夫たちにも、やがて鼻についてまいりました。

なにせ、時めく太夫たちと来たら、契る前の手続きがおどろおどろしく、下層のものどもなら「いくよ」「あいよ」の六文字で済むことを、「傾城の色　洪水の川の底　ほれてほれれば　深くなるらむ」とまず床しき三十一文字によみ、それから、書をかいて見せ、画をかいて示し、花を活けて飾り、香を焚いて嗅がせ、琴をカラリン、三味をツテトン、鼓をポコポコ、太鼓がドコドン、茶を立て、碁を打ち、おしまいに双六で遊んでようやく上り――というように、稽古事を総ざらいしないうちは、させてくれないのです。これだけのことが済むまではとても一刻二刻では時が足りず、契りが始まるころは、はや夜も明けそめて、夜明鴉がガァガァガァ、浅草寺の明けの鐘がボーンボーンボーン、近く

の紙屋で楮を打つ紙砧の音コトコトコト、油揚げ売がアーブラーゲ・アーブラーゲ、世間がだいぶ騒々しくなっているのでした。それにガァガァガァのボーンボーンボーン、コットコトのアーブラーゲと、こういろいろな合の手が入ったのではコトが不首尾に終るのは申しあげるまでもありません。

こんなわけで、殿様は、奥方様では物足りず、太夫では七面倒、世の中にはいったい、心やさしくあのことだけにすべてを傾けて尽してくれる女子はいないものであろうかと、おなやみになっておりますうちに、太夫たちが桐壺のことを噂して「あんな芸なしは里の恥でありんす」といっているのを御耳におとめになり、「それこそ求めておった女子じゃ」とさっそく桐壺と枕をおかわしになりました。

桐壺は外見はいかめしくとも、心根のやさしい遊女でした。それに、桐壺は自分になんの芸もないことを恥じていて、芸のなさを心のまことで補おうとも思っておりました。そこで、殿方がお見えになりますと、肩をお揉み申し、耳垢をほじくり申し、お弄り申し、弄られ申し、おじどき申し、お銜え申し、おいかせ申し、いき申し、お拭き申し、お拭かせ申し上げ、あらん限りのまことを尽しましたので、殿様は心からたまらなくいとしいものに思し召して、まことに見る眼も眩い御寵愛をおかけ遊ばします。

芸事究めたる太夫たち、床扱いに長けたる格子の群、器量鼻にかけたるさん茶どもの「低く見ていた桐壺に殿様を奪られたのは口惜しい」と、燃やす嫉妬の炎はまるで昼を欺くように思われます。

けれど、殿様はいよいよ足繁に桐壺の部屋へお通いになり、妓楼の主や茶屋の若い者や遣手婆などが「こんなことでは花魁の格づけや格式があってないようなものになってしまう。他のお客さんにも顔向けができないじゃないか」と聞えよがしの高声にもすこしもお構いにならず、かえって桐壺の病

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

いをいたわって御侍医に命じて脈をとらせたり、高価な友禅の裲襠を一度に京の都からお取り寄せになったり、遊里の語り草にもなりそうな扱いをなさいます。その御寵愛の深さは寺子屋へ行き来する童たちがこんな戯れ唄をはやして歩いたのでもわかるほどでした。

小壺　たこ壺　油壺
大壺　骨壺　砂糖壺
壺にもいろいろあるけれど
殿の抱く壺　火消壺
壺の内側　ぐじょ濡れで
熱い金棒　入るたび
じゅうっと白い　湯気が立つ

塩壺　米壺　宝壺
墨壺　茶の壺　いんく壺
壺にもさまざまあるけれど
桐壺　そのじつ肥料壺
壺の中身を　よく見れば
蛆虫百匹　紙少々

それからみみずが五千匹

そのうちに、前世からの御契りが深かったのでしょうか、またとなく、醜悪で可愛げのない男のお子が、お二人の間にお生れになりました。殿様はすでに奥方様との間に、一子、おもうけになっておられましたが、それは、お家を絶やすまいという義務の睦み事によるお子。それにひきかえ、このたびの子は、お気合いをお入れになった可愛いお子、殿様は向島に寮をお建てになり、桐壺とそのお子をお住わせになりました。

そして、お暇がお出来になりますと、塗り駕籠にゆられて、向島の寮へお出ましになり、お子をお抱き遊ばされたり、高い高いを遊ばされたり、べろべろばぁを遊ばされたり、お子とお遊び遊ばされるのを唯一の楽しみに思い遊ばされておりました。

このお子のだんだん御成長になるお顔だちや性質などは、ほかに類のない珍しいもので、見るからに、悪たれの権化で、悪ずれしていて、それでいて変にのんびりした様子も窺えて、寮の近くの人なども、お子を見るたびに「先が案じられる」と、眼をまるくして驚き呆れています。

お子がお生れになって半年ほどたって、出産のときの心労によるものでしょうか、桐壺の容態がにわかに重くなり、わずか五、六日のあいだに別人のような衰え方です。

平素もたいそう見苦しい人が、面やつれして骨と皮のようになり、あれこれと取り越し苦労をなさる様子は、地獄の女邏卒さながら、で、下女や下男までが、怖しく思うほどです。

悪いことには悪いことが重なると申しますが、ほんとうにその通りで、こんなときに、殿が江戸か

ら国表へお帰り遊ばされることになりました。

そこで、殿様は下男に後のことをお託しになって、こう申されました。

「ここに、守り袋と守り刀がある。これらはあの子が余の落胤であることを証すもの、大切に預っておいてもらいたい。三年後にまた江戸へ参るから、その必要もあるまいが、万一を考えて用意いたした。それから、ここに金子が二百両ある。これは生活費と治療費じゃ。薬餌に費用を惜しんではならぬ。よいな。もうひとつなにか事が生じたときは、江戸家老に諮るがよい。では、桐壺とあの子の世話を、きっと頼むぞ」

殿様は、あのときも死出の旅に出るときも、行くときはたがいに一緒に行くと約束したではないか、まさか余の留守の間に、一人であの世へ行くことはあるまいな、という歌を桐壺の枕元にお残しになり、後髪をひかれる思いで、江戸を発ってお行きになりました。

ところで、殿様が後事を託した下男が、じつは大へんな悪者でしたから、桐壺はよくよく悲しい星の下に生れた人です。

下男は表向きはまじめそうですが、一皮むけば中身はなかなか油断のならない小悪党で、人の子らしい情けなどかけらも持ち合せてはいないむごい男でした。桐壺は病いの床に明日をも知れぬ衰えた躰を横たえているというのに、そして、子どもはまだ立って歩くことも出来ないというのに、かねてから出来合っていた下女としめし合せ、二百両を懐に、守り刀を行きがけの駄賃に、「待って……」と死ぬような思いで取りすがる桐壺を足蹴にして、どこへともなく姿をくらませてしまいました。

桐壺には、そのとき振り絞った力が、残されていた力のありったけでした。……桐壺は切ない思い

をこの世に残しながら、あの世へ旅立っていってしまったのです。わが子を抱き寄せようとしたのでしょうか、その細い腕を、子どもに向って差しのべたままの姿で……

子どものほうは、そんな悲しいことが起っているとは知らず、母の様子を不思議そうに見、そして、這い寄って母の、いまは冷たくなってしまった乳房を無心にしゃぶっていますが、親子の別れというようなことはなんでもないときでも悲しいものなのですから、まして、この別れの場合の哀しさは、ここでいくら言ってみても仕方がありません。

それでも、わずかでも心を慰められるのは、間もなく、この寮へやって来た者があり、ひもじさに火のついたように泣きわめく子どもの声にただならぬ気配を感じ、庭へ廻って縁鼻から内部をのぞいてくれた、ということです。この男は偶然に通りかかったのではありません。葛西の百姓で、ちょうどその日が、寮の後架の下肥を汲む日に当っていたのでした。そして、さらに嬉しいことに、この男は人情味のある、心やさしい性質を持っていましたから、子どもをわが手に引きとって育ててやろうと考え、その上厚い信仰心にも恵まれていましたので、桐壺を手厚く葬ってやることにしました。百姓の出でありながら、花魁から、大名の想い者へと大きな運命の波に流された桐壺が、ほかの誰でもなく、やはり同じ階級の百姓の手によって葬られたのは、これもなにかの因縁なのでしょう。

日に日が重なり月となり
月に月が重なり年となり
年と年が重なり十六年

光のように時は去る……
十六年もたちますと
四つの子ならば満二十歳
二十歳の娘は大年増
大年増ならお婆さん
お婆さんなら墓の下
そして桐壺の子は……

十六に成人した桐壺の忘れ形見は、源次という名前で、近隣に轟いています。どうして、源次という名になったかと申せば、あの命の恩人の百姓がそういう名をつけたからでした。百姓の名は源兵衛で、桐壺の子を育てようと決めたときすでに長男が生れていましたから、自分の名の「源」と、次男坊の「次」をとって、源次と呼ぶことにしたのです。

源次は働き者でした。田や畠に出てよく働き、田畠以外のところでは、よく乱暴を働きました。頭がよくて、村で起るたいていの悪さは、源次の思いついたものでした。容貌は母の桐壺に似て、それはひどいものでしたが、そこに父親のおっとりのんべんだらりとした面影が加わって、なんとなく憎めない愛嬌があります。やたらに押しが強いところは誰にも似ていませんが、この押しの強さは村の娘を口説くときに、大そうものを言うのでした。目はしがきくことはおそろしいほどで、これは、源次の哀しい生い立ちを憐んで、天がお授けになったのでしょうか。

肥料舟を江戸へ向けるとき、舟は空ですけれど、空舟ではもったいないと思い、荷を頼まれて手間賃を稼ぎます。江戸に火事があると聞くと村中の肥料舟を借り切って、木場へ行き、木材を運ぶ手伝いをして、また、小金を稼ぐのです。江戸に火事はしょっちゅうのことですから、火事のたびに小金が転り込み、小金がまとまると舟を作らせ、ちょっとした運送業をはじめます。その一方で、近くの川で、鰻や鯉を飼います。——こうして、源次の家は村でも一といって二と下らない金持になって行きました。

十七の春、源次は、はじめて遊里へ足を向けましたが、頭をひとつふたつ振って才覚のひとつもひねりだせば、また稼げる自信がありますから、むろん、お大尽のようにはとても行かないのですけれど、金ばなれがよく、遣手でさえも、源次を見るときは、皺くちゃの顔に、愛想笑いを絶やしません。

さて、ある夜、馴染みの下っぱ遊女と一合二合、汗を掻いたあと、なんの気なしに廊下に出た源次は、思わずその場に立ちつくしてしまいました。廊下の向うからばったらばったら歩いてくる遊女が、まるで、自分とそっくりの顔をしているではありませんか。しかも、隣の部屋からその遊女を迎えて顔を出した四十四、五の客の顔が、また、自分と似ているのです。これはどうしたことでしょう？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton